

中村彝(なかむら つね)

明治20 - 大正13年(1887 - 1924)

明治20年(1887)	7月3日、水戸藩士の子として茨城県東茨城郡水戸市上市寺町（現、水戸市金町）に生まれる。
明治21年(1888)	5月23日、父順正死去、49歳。
明治26年(1893)	水戸市上市尋常小学校（現、水戸市立五軒小学校）に入学。
明治31年(1898)	9月8日、母よし死去、47歳。
明治37年(1904)	名古屋陸軍地方幼年学校を卒業するが、結核のため軍人になることを断念し、療養中に画家を志すようになる。
明治39年(1906)	東京の白馬会研究所に入る。そこで中原悌二郎、鶴田吾郎らを知る。
明治40年(1907)	太平洋画会研究所に移り、中村不折、満谷国四郎らの指導を受ける。市ヶ谷基督教会で植村正久牧師から洗礼を受ける。
明治41年(1908)	新宿中村屋のアトリエに、帰国したばかりの彫刻家荻原守衛を中原悌二郎と訪ね、感化される。
明治42年(1909)	第3回文展に「曇れる朝」「巖（いわお）」（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）を出品、初入選。後者は褒状を受ける。
明治44年(1911)	中村屋裏の画室に移り住む。
明治45年／ 大正元年(1912)	この頃から肺患が進み、喀血が始まる。
大正2年(1913)	この頃から、中村屋の長女、相馬俊子をモデルに一連の少女像を描く（～3年）。
大正3年(1914)	第8回文展に「小女」（株式会社中村屋蔵）を出品、3等賞受賞。年末から伊豆大島に滞在（～4年）。
大正4年(1915)	相馬家に俊子との結婚を申し込むが反対される。
大正5年(1916)	新宿区下落合にアトリエを新築。第10回文展に「田中館（ルビたなかだて）博士の肖像」（東京国立近代美術館蔵）「裸体」（当館所蔵）を出品。前者は特選となる。
大正8年(1919)	茨城県那珂郡平磯町（現、ひたちなか市平磯）に転地療養。
大正9年(1920)	第2回帝展に「エロシェンコ氏の像」を出品。
大正12年(1923)	前年、彝の画室に集まる画家たち、曾宮一念、鶴田吾郎、鈴木良三らが結成した金塔社の第2回展に「女」を出品。第4回帝展審査員に任せられたが、病のため立ち会えず。9月1日、関東大震災に遭遇するが、無事避難する。この頃、一連の「髑髏の静物」を描いたが、震災を機に花の静物を描く。
大正13年(1924)	（1924）第5回帝展に「老母の像」（水府明德会蔵）を出品。 12月24日、下落合のアトリエにて死去。東京都新宿区下落合のアトリエで死去
大正14年(1925)	彝の遺骨は水戸市の祇園寺に葬られる。

水戸市に生まれた中村彝は、明治の終わりに彗星のように画壇に現れ、大正期にかけて活躍し、37歳で夭折した、近代日本を代表する洋画家です。

---

## 生い立ち

彝は5人兄弟の末っ子で、父は旧水戸藩士。幼い頃から絵どころがあったといわれています。17歳で名古屋陸軍地方幼年学校を卒業しますが、結核により軍人になることを断念します。

---

## 画家としての出発

病におかされた彝は、暖かな千葉の海岸地で転地療養を繰り返します。そこで彝は以前から好きであった絵の道を目指して房州白浜に出かけ写生をして過ごす一方、白馬会研究所や太平洋画会研究所に通い本格的に絵に取り組みました。研究所では生涯の友となる中原悌二郎や鶴田吾郎らと出会っています。

やがて、全国的な展覧会、文部省美術展（文展）が開催され、これに出品すると、その3回展で初入選、褒状を受賞し画家として大きな一歩を踏み出します。

「裸婦習作」明治41年／「中之作風景」明治41年／「曇れる朝（下絵）」明治42年  
資料「葉書（野田半蔵宛）」明治40年7月30日付／同8月26日付

---

## 中村屋サロン

明治40年（1907）に新宿駅前に開店したパン屋「中村屋」は文化人が集うサロンの役割を果たしていました。相馬愛蔵、黒光（こっこう）夫妻の経営する中村屋には、愛蔵と同郷の荻原守衛（もりえ）の他、戸張孤雁、高村光太郎らが集い、美術や演劇の交流の場として、独特の賑わいをみせました。明治44年、彝は愛蔵、黒光夫妻の厚意で中村屋裏の木造アトリエを借りて住み、そこで制作するようになります。

「自画像」明治42年頃／「静物」大正2～3年

---

## 恋愛と伊豆大島への旅立ち

結核が一進一退の彝の生活の面倒をみるようになった相馬家の長女俊子は、やがて、彝の作品のモデルをするようになります。印象派のルノワールにあこがれた彝は、健康美にあふれた俊子をモデルに多くの優品をのこしました。ほどなく、彝は俊子に恋をしますが、その恋愛は実らず、精神的な動揺と激しい葛藤に悩まされます。大正3年（1914）12月、俊子との愛に悩みつつ、伊豆大島へと旅立つこととなります。大島では、いつも筆致のおだやかな彝にはめずらしい大胆な筆触の作品が描かれました。

「少女像」大正3年（素描）

「大島風景」大正4年（油彩）／「大島風景」大正4年（素描）

---

## アトリエの彝

大正5年（1916）、パトロンからの援助などにより、現在の東京都新宿区下落合に建てられたアトリエが、画家後半期の制作活動の舞台となります。彼は、短い画業にもかかわらず、レンブラント、セザンヌ、ルノワールなどの影響を受けつつ、西洋絵画を咀嚼しながら、真の芸術を求め続け、「エロシエンコ氏の像」（東京国立近代美術館蔵、重要文化財）、「頭蓋骨を持てる自画像」（大原美術館蔵）など数々の傑作をのこしました。

アトリエは、昭和63年、茨城県近代美術館の開館にあわせて、敷地内に新築復元されました。現在は遺品と共に公開しています。

また、増改築を経て老朽化した当初のアトリエは、新宿区によって保存されています。

「裸体」大正5年／「目白の冬」大正8年／「男の顔」大正9年

「カルピスの包み紙のある静物」大正 12 年／「花」大正 12 年，県指定文化財  
「自画像」大正 11 年（素描）／「髑髏の静物」大正 12 年（素描）

## 中村彝のアトリエ



近代美術館敷地内に東京都新宿区下落合にあったアトリエを新築復元しています。  
内部では、彝の遺品や資料を展示し、無料公開しています。

公開時間	火～金 13：00～15：00 土・日・祝日 10：30～15：00
休室日	美術館休館日に同じ

## 中村彝「裸婦習作」明治 41 年



「中之作風景」 明治 41 年



「曇れる朝（下絵）」 明治 42 年





「自画像」明治42年頃年



「静物」大正2～3年



「少女像」大正3年（素描）



「大島風景」大正4年（油彩）



「大島風景」大正4年（素描）



「裸体」大正5年



「目白の冬」大正8年



「男の顔」 大正9年





この作品は、関東大震災の直後、画家の死の前年に描かれています。画面には何か張り詰めたような凜(りん)とした気分が漂い、凍るような鋭利な感覚、棘(とげ)のように突き刺さってくる線の錯綜が特徴的です。また、画面左上の帽子掛け、中央上方の三角形部分(この三角板は彝が実際に作り、キリストの磔刑図が描かれていました)、そしてカルピスの包み紙の縁枠などに見られる波状文様が、画面のあちこちにくり返され、そこにリズムカルな脈わいを与えています。

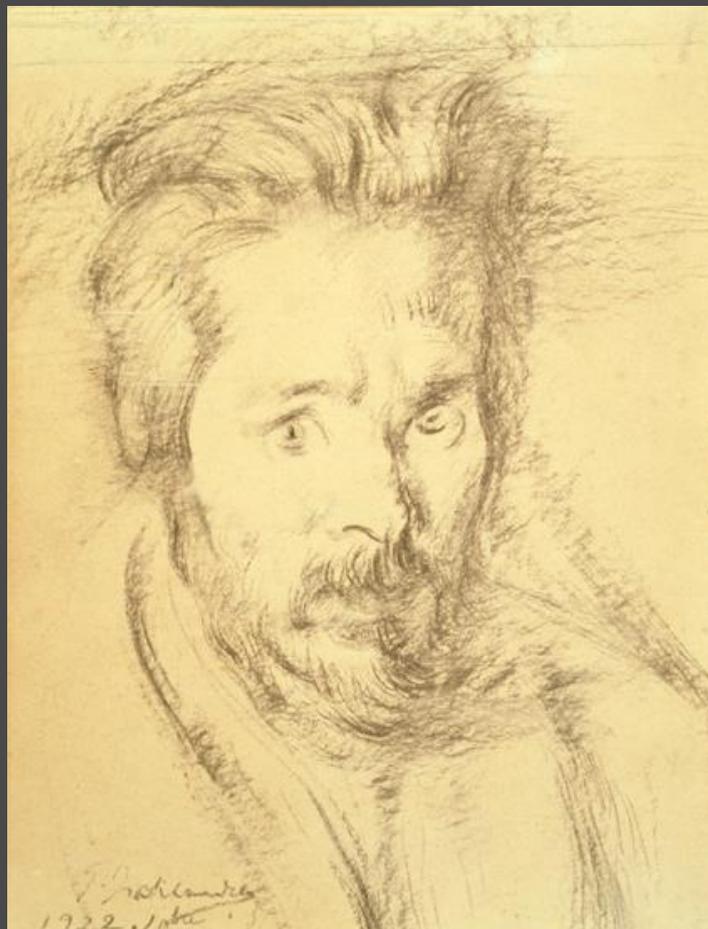
彝のこうした作品に、大正時代後期にわが国に入ってきた未来派から構成主義に至る西洋美術の様々な、そして急速な影響を見ることもおそらく可能でしょう。確かに大震災は、彼に心境と作風との変化をもたらしましたが、その具体的な造形上の進展を導いたものとしては、こうした前衛美術も重要な力のひとつとなって働いていたことが想像されます。

中村彝は、真に自己の内面生活と芸術上に表現方法とを直結させる力を持っており、愛と死、生と死との激しい緊張感の中に創造の根源を見出すことのできる芸術家でした。彼の伝記的事実を調べ、その作品展開を追っていくと、幼い頃から死は絶えず彼の周辺にあり、自らも不治の病を宿して、自己の生命とひきかえに彼の作品が制作されていたことがわかります。その意味で彼のいわゆる「生の芸術」は、むしろ死を内在させた生の緊張感の芸術といえるでしょう。

「花」大正 12 年



「自画像」大正 11 年 (素描)



「髑髏の静物」大正12年（素描）

